

序

飛鳥の水時計、山田寺回廊の発見と、大々的に報ぜられたことは記憶に新らしい。このような大発見の陰で、一般にはあまり知られない重要な発見も各地で相ついでいる。

本書は、奈良市教育委員会の依頼によって1982年10月に発掘した平城京の東堀河とそれに架かる橋の報告である。

堀河は東西の市に物資を運ぶため、京の東西に設けられた。しかし堀河に関する史料は誠に少ない。西堀河を秋篠川にあてることは諸説一致しているが、東堀河については異説があった。東市の北辺で埋没した東堀河を発見し、論争に終止符を打ったのは1975年のことである。今調査地は東市の南側にあたる。二度の調査から浮ぶ堀河の姿は、小さな川船を両岸から曳いたというものである。もう一つの成果は、多くの橋材が出土し、この時代の橋復原の資料を得たことである。また、出土遺物には人面墨書土器、人形なども多く、東堀河が祓川であることが明らかになった。これは平安京の七瀬の祓の起源を考える上で看過しえない。このような成果をあげることができたのは奈良市教育委員会および関係諸機関の協力のお陰である。厚くお礼申し上げる次第である。

1983年3月

奈良国立文化財研究所長

坪井清足